

CSR活動

三菱重工グループ CSR行動指針

(2007年7月制定)

わたしたちは、この地球にたしかな未来を実現するために、

地球との絆

緑あふれる地球を環境技術と環境意識で守ります。

社会との絆

積極的な社会参画と、誠実な行動により、社会との信頼関係を築きます。

次世代への架け橋

夢を実現する技術で、次世代を担う人の育成に貢献します。

社会の進歩に貢献する“ものづくり”でCSRを遂行

三菱重工グループは、社是の精神に則り、社業を通じて社会の進歩に貢献する“ものづくり”企業としてエネルギー・環境保全機器や社会インフラを支える製品・技術を世界に提供し、地球規模の課題解決に貢献しています。

多様なステークホルダーに配慮した事業活動を展開し、得られた利益をすべてのステークホルダーの皆さまに最適に還元するとともに、卓越した技術・製品の提供を通じて、人と地球のたしかな未来を実現することをCSR(企業の社会的責任)の基本としています。

「三菱重工 環境ビジョン2030」を策定

持続可能な未来を実現するには、エネルギーの安定供給(Energy security)、環境保全(Environmental protection)、



持続的経済発展(Economic growth)の3Eを同時に実現することが必要との認識に立ち、2030年を目標として制定しました。3E実現に向け、つくる(発電)・ためる(貯蔵)・めぐる(循環)・つかう(消費)・さぐる(探査)の各技術・事業領域における「約束」を掲げ、陸・海・空・宇宙で17項目の具体的目標を設定しています。

「ISO26000」に配慮した取り組みを推進

三菱重工グループでは、国内はもとよりCSRのグローバル展開にあたり、組織の社会的責任に関する国際的なガイドラインISO26000を重視し、2011年度から、CSR活動の推進に活用しています。2011年度は、重要な取り組み特定の参考となる「有識者とのダイアログ」や、「地域貢献・被災地の継続支援活動」によるコミュニティ参画の推進などを実施しました。今後も、ISO26000を活用し、ステークホルダーの参画を得ながら、バリューチェーン全体における重要な取り組みの特定を進め、グローバルスタンダードに沿ったCSR経営を目指していきます。

当社ウェブサイト「CSRレポート(社会・環境報告書)」ページに、詳細情報が掲載されていますので、ご覧ください。
<http://www.mhi.co.jp/csr/csrreport/index.html>

CSR TOPICS

Topic
1

地球との絆

エネルギー転換を進める中国での貢献—高効率ガスタービンや技術を提供—

三菱重工は、大型ガスタービン製造技術移転先で協業パートナーの東方タービン有限公司とともに、成長著しい中国・北京市周辺に電力と暖房熱源を供給するガスタービン複合発電プラントを納入しました。

冬期にはガスタービンの高温の排熱を利用して作った蒸気の大半を暖房熱源として供給し、それ以外の時期には高温の蒸気を発電に再利用する複合発電システムとしたことで、需要に応じた電気と熱の最適な供給が可能となりました。また、当社の最新型ガスタービン(M701F4形)の採用

により、発電効率が向上し、使用燃料が減少することで、従来型の年間CO₂排出量約160万トンに対し3.5万トンのCO₂削減効果が期待されています。



Topic
2

社会との絆

大規模肥料プラントの建設で世界の食糧自給に貢献

当社は、世界トップレベルの化学プロセス技術を駆使して、アジア、ロシア、中東など世界各地で40基以上の窒素肥料プラントを建設・納入し、世界の食糧増産に貢献してきました。2011年度は、10月にマレーシアの国営石油公社から大型肥料製造プラントを受注したほか、11月にはアフリカのアンゴラでも日本企業3社と共同で、同国の国内向け肥料製造プラントの基本設計、図面・契約書作成、現地調査などに関する先行エンジニアリング契約を結びました。増え続ける人口を背景に、世界の肥料需要は益々拡大して

いくことが予想されており、当社はこれからも世界各地で肥料プラント事業を積極的に進め、食糧問題の解決に貢献していきます。



Topic
3

次世代への架け橋

全国の事業所がその特徴を活かした理科教育を実施

当社は、科学技術で地球社会に貢献できる人材を育てていくことが「ものづくり」企業としての社会的責任の一つであると考え、全国の事業所で科学技術の魅力を子どもたちに伝え、ものづくりへの興味・関心を高める次世代支援活動として「理科教室」や「ものづくり学習」を展開しています。2011年度は、各事業所周辺の小学校などの児童・生徒約2,700名を対象に当社の製品・技術を活用した「理科

教室」や「ものづくり学習」を計54回開催し、理科の面白さと「ものづくり」に触れる学習機会を提供しました。

